

馬

琴

日本古典鑑賞講座 第二十五卷

日本古典鑑賞講座

第二十五卷

馬 琴

昭和三十四年二月十日 初版發行  
昭和三十七年五月二十日 再版發行

定價四六〇圓

編 者 水野 稔 みずの みのる

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

發行所 株式會社 角川書店 かどかわ しょうてん

東京都千代田區富士見町二ノ七  
振替 東京 一九五二〇八  
電話九段(331)〇一一一〇一一五

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

馬

琴

水 野 稔  
編

角 川 書 店



## 解説

### 3 解説

戯作者からの脱出 『南総里見八犬傳』の著者曲亭馬琴は、本姓瀧澤、名は興邦、後に解。通稱左五郎、後に佐吉。著作堂主人・養笠漁隱・飯臺陳人・玄同などの別號を用いた。明和四年（一七六七）六月、父が用人として仕えていた、川越城主松平家の支族である松平信成の江戸深川の邸内に生まれた。兄二人妹二人の間に生い立ち、九歳のとき父に死別して、一家窮乏のうちに、彼も十四歳で主家を出奔し、江戸内外を放浪するような生活を遂げたこともあった。醫を志して成らず、早くから俳諧をたしなんだことから、やがて文筆で立とうと決意することとなった。青年期の馬琴は野望にみちていたが、かなり奔放な落ちつかぬ生活態度であつた。

馬琴を世に出したのは後に彼の好敵手となつた山東京傳である。馬琴の處女作である黄表紙『盡用而二分狂言』は京傳門人大榮山人の名を署して寛政三年（一七九一）に出た。馬琴はそのころ洒落本禁制を犯してとがめを受けた京傳のもとで黄表紙の代作などを試みるうちに、書肆葛屋重三郎方で働くことになり、作者活動の土臺もできたが、やがて、寛政五年（一七九三）二十七歳で履物商の寡婦に入婿となつた。それは生活の資を得るためで、間もなく姑の死後商賣はやめ、著述に専念しようとした。やはり微祿ながら厳しいしつけをうけた武士の血をうけ、そして時世がもう一昔前の武家出身の作者の氣樂な洒落のめした戯作がよるこばれるような時でもなかつたし、馬琴は得意でない黄表紙などよりも、もつと本格的な文學活動を望んだ。たまたま享和二年（一八〇二）三十六歳の夏から秋にかけての三ヵ月京阪に旅行を試みたが、この旅によつて、西鶴近松以來の上方文學の傳統や京阪文人の風格等について大い

4  
に感悟するところがあり、馬琴は歸東後、自分の道を歩むことになつたのである。それは最も知識的で、しかも世道人心に關係をもつ思想的支柱の通つた讀本の作者として再出發することであり、江戸の戯作者の生活氣分からできるだけ脱出しようとするのであつた。文化初頭からの京傳との競争がここに始まる。

江戸文壇の王者 異常な精力と勤勉によつて、馬琴は讀本において京傳を質量ともに凌ぐ一流作者の地位に至り、文化末年に病歿した京傳に代つて江戸文壇の王者となり得たのである。彼の『椿説弓張月』や『南總里見八犬傳』等の長編雄作は讀本の價值を高めたし、草双紙もまた馬琴によつて長編化されて讀本の支配下に完全に入つた。作品の成功はまた作者の社會的地位を高め、松前老侯の知遇を得て、不肖の子宗伯もその御用醫にまでなつた。しかし虚弱な宗伯が天保六年（一八三五）早世した後はようやく家庭的な不幸が數々襲うて來ることになり、妻のお百はその無智わがままな性質から彼を苦しめ、一家の經濟的念慮はつねにつきまとつて、馬琴の著述生活をいつそう苦惱にみちたものとした。さらに老體の酷使は天保五年六十八歳のころの右眼失明からあらわれ、やがて天保十一年七十四歳の彼に作者として致命的な兩眼失明という悲慘をもたらした。『八犬傳』の完成を目の前にひかえて、馬琴は宗伯の妻お路に口授して創作をつづけ、この努力は『八犬傳』の完成後、嘉永元年（一八四八）十一月四谷信濃坂の自宅で八十二歳で歿するまでなされたのである。長壽のゆえでもあるが、生涯の作品讀本約四十種、草双紙（黄表紙・合巻）約百七十種、その他隨筆雜著のめぼしいものだけでも十數種を數え、克明に記された日記の殘存するものを見ては、單に著述の量からだけでも、まさに前代未聞の作者といわなければならない。

馬琴の性格は、傲慢不遜・偏狹・利己的・術學などという言葉でおおわれたこともあつた。しかし、强健な體質にちちうつて精進努力してやまぬ意志と、几帳面で細かく行きとどく注意力の持主で、多少理窟つばい正義感の強さと潔癖性はあつたが、もともと他人と争えない、むしろ小心翼翼たる氣弱い性格であつたのが事實らしい。そして正直であつただけに、武家の出身に伴なう階級的な自負や氣質が、馬琴をして純粹に町人的戯作者生活を恥じ、強い

非社交的な孤獨を愛するような態度をとらせることになつていたのである。

**馬琴の讀本** 讀本は寛延二年（一七四九）の『英草紙』（近路行者）からはじまるとされているが、上方の浮世草子の末流の寫實的描寫が新鮮さを失い、傳奇的・浪漫的傾向が擡頭して來たところ、中國の白話體（口語體）小説を日本の歴史・傳説などにとりあわせた繚案によつて小説界に新生面をひらこうとしたところから起つてゐる。上田秋成の『雨月物語』のような怪談・奇談集が多かつたが、建部綾足の『本朝水滸傳』のように、長編の繚案もあり、寛政以後江戸に移つてからは、首尾一貫した筋をもつ長編物がよるこばれ、世間によく知られた演劇の筋とないまぜにしたりする傾向も生まれ、また儒教主義的教化の色彩がつよくなつて來た。文章も直譯風のものから、次第に朗誦するに足るような流麗な和漢混淆文となつて來てゐる。

馬琴の讀本は普通題材の上から、敵討物・傳説物・情話（巷談）物・史傳物などと分類される。このうち彼自身が本領と考えたのは史傳物であつて、『弓張月』（文化四年刊—八年刊）にはじまり、『俊寛僧都島物語』（文化五年刊）頼豪阿闍梨怪風傳』（同上）等を早くから出しているが、文化年間には競争者である先輩の京傳がさかんに歌舞伎・淨瑠璃に取材した演劇趣味の濃厚な讀本で人氣を得ていたので、その對抗上情話物にかなり力をそいでゐる。その中では『三七全傳南柯夢』（文化五年刊）などが最も自信のあつたものである。その相手の京傳が、野心作『双蝶記』（文化十年刊）が意外に不評であつたところから讀本の作を斷念し、やがて病歿するに及んで、馬琴ははじめて史傳物にじつくりと取組むことができた。その代表作である『八大傳』とともに、『朝夷巡島記』（文化十二年刊—文政十年刊）『近世説美少年録』（文政十二年刊—天保三年刊）『開卷驚奇俠客傳』（天保三年刊—天保六年刊）などが併行して書きつづけられ、すべて中國の長編小説を借りた規模の大きな作品となるべきものであつたが、『八大傳』完成のために未完のままに遺されている。

常に史上不遇に終つた人物をとり上げて、ある程度史實にのつとりながら、正史にあらわれていない範圍において

自由な空想をはしらせ、現實に報いられることの薄かつた人々の英雄的行動を描いて賞讃し、またはその子孫に對し餘榮を與えようとする。これが馬琴の史傳物のきまつた意圖であり方法である。それは逆に、徳も薄く邪道にさえよるながら、正史の上に榮えている人々への「心誅」を加えることにもなる。そこに、浪漫的・傳奇的な讀本の表現による馬琴一流の理想の世界の設定と人間の創造があり、勸善懲惡と因果應報の理法が存するのである。市井の痴情に狂う男女が、彼によつては武士道の節義に殉ずる人々となることの多い、情話物の場合なども、結局はこれと同じゆき方をしたものとといえる。

『南總里見八犬傳』『八犬傳』は文化十一年（一八一四）十一月に第一輯五卷が出てから、以後一、二年おき、または毎年續けて出され、天保十三年（一八四二）三月第九輯下峽下の下編最後の五冊を刊行して、全九十六卷百六冊の局を結んだ。作者四十八歳の時から七十六歳に至る二十八星霜を経たものである。九輯でとめたいという板元の意向と、作者自身も九を陽の數の最終として固執したために、第九輯だけが卷五十三下にまで及んで全卷の半ば以上を占める。すべて百八十回であるが、百七十九回以後は一回がまたいくつかに分れる。最初の計畫では二、三年で完結する豫定であつたのが意外の長編となつたもので、それがこの編・卷數や回數の奇形をもたらしたものである。これを單に世評の高さにつられて、情性にまかせていたずらに引きのばしたと見るのは當らない。構想の變更や擴大はあつたろうが、馬琴としてはあくまで満足の中くまで書きつく情熱に燃えていたのである。

板元もこの間に山崎平八（山青堂・美濃屋甚三郎（涌泉堂）・丁子屋平兵衛（文溪堂）と變つたし、挿繪も柳川重信・溪齋英泉・二世柳川重信・歌川貞秀・歌川國貞等多くの繪師が交替または分擔している。

『八犬傳』は『八犬士傳』である。馬琴は榎島昭武の『合類大節用集』（享保二年）などに名前だけ見える里見八犬士を、かれ一流の史實と虚構の交錯の方法によつて自由に活躍させようとし、その時代的背景には『里見記』『里見九代記』『房總治亂記』『里見軍記』等を参照し、また中村國香の『房總志料』によつて房總の地誌や里見氏の事蹟など



をなるべく正確なものにしようとした。そしてかねて中國の雄大な長編作に匹敵するものを、わが國にもたらしたいと念願していた馬琴は、この作品で、發端をはじめとして全體の構想を『水滸傳』にまね、『三國志演義』その他の中國作品からも多くのものを借りている。日本のものでは、かれの愛讀した『太平記』から敘述・描寫を借りたものが少なくない。その換骨奪胎、譌案の手ざわはまことに見事である。多くの借り物にもかかわらず、それらがかれ自身の見解によつて解釋され、かれ自身の意圖による構想に組みなおされていて、近世の作品中でもこれほど強く作者の體臭を感じさせるものも珍らしいのである。その登場人物四百餘人、描かれた時代は主に室町末期の六十年間、舞臺は江戸近在を中心として諸國にまたがるというスケールの大きさを誇る一大ロマンであるが、意外に出でて意外に終る起伏重疊する複雑な事件や、善惡とりどりの人物の行動と運命が、一絲みだれぬ緊密な脈絡のもとに彼此對照の妙を發揮し、勸懲の正しさによつて統一されている壯麗さは、裏返せばそのまま缺點と指摘されるようなものを多く含んでいるとしても、やはり日本文學史上の一偉觀たるを失わない。

「われを知るものは、それただ八大傳か。われを知らざるものは、それただ八大傳か」(第九輯下帙下套之中後序)とは、『八大傳』完結を目前にひかえて、盲目の馬琴が自嘲的に戯れて記した語であるが、あらゆる生活的苦惱と肉體的困難をのりこえて、ライフワークの完成にすべてを注いだ一戲作者の三昧境は、それだけでも近世文學の輝かしい記念碑ともいえるだろう。

『椿説弓張月』『弓張月』は文化二年(一八〇五)、作者三十九歳の時に着手されたもので、文化四年正月に前編六卷を刊行、以後後編六卷、續編六卷、拾遺五卷と續けて、文化八年(一八一二)三月殘編五卷を刊行完結した。初版の板元は平林堂平林庄五郎である。

表題の角書に「鎮西八郎爲朝外傳」とあるように、保元の亂に敗れて伊豆大島に流され、そこで討死したこの史上不遇の人物を生きたがらせ、琉球で活躍させるといふ奔放な空想のもとに、理想的な英雄の像を描いたものであ

る。後半の琉球での構想を中國の『水滸後傳』に學び、部分的には『水滸傳』『三國志』『太平記』などにより、また演劇の趣向を借りたところも多い。『保元物語』などで史實を整えているほか、『伊豆國海島風土記』『八丈筆記』とか『中山傳信錄』『琉球談』などで、伊豆諸島や琉球の地理・風俗の正確を期している。

『弓張月』は史傳物の最初の試みとして、圓熟の中にも潑刺とした生氣にあふれている作品である。人物の性格なども、八犬士が徳目の化物などと評せられるのにくらべると、はるかに自然な人間味に富んだものとなつてゐるし、文章も、晩年に著しくなつた七五調の華麗さはないが、溫雅流麗な調子で貫かれている。構想は『八犬傳』の緊密周到にくらべると、いくらか破綻も感ぜられるが、伊豆諸島・九州・琉球と、海洋をさしはさんでの舞臺の大膽な轉換は、やはり特異な規模の大きさをもつ作品たらしめている。

『弓張月』は『八犬傳』のように、作者馬琴のすべてが凝固した代表作とはいえないが、少なくともかれの最高傑作の一つであることは確かである。ただ本書では紙幅の制限から、附録的な扱いにとどまらざるを得なかつたのは遺憾である。

## 目 次

## 解 説

戯作者からの脱出 (三) 江戸文壇の王者 (四) 馬琴の讀本 (五) 『南總里見八大傳』 (五) 『椿説弓張月』 (五)

水 野 稔

三

## 南總里見八大傳

『八大傳』のかぎ (三七) 思想的支柱 (三八)

## 富山の洞

發端の重量感 (三九) 朗誦に耐える小説 (四三) 奇怪な構想 (四五) めぐる因果の輪 (四六) 如是畜生發菩提心 (四七) 馬琴の愛讀書 (四九) 受胎告知 (五一) 「さわり」の獨舞臺 (五三) 大のための法華經 (五五) 處女の純潔論 (五七) 梁山泊と八大士 (五九) 飛散した八玉のゆくえ (六五)

## 大塚の里

大士傳の開幕 (六六) 與四郎犬 (六七) 神女の奇瑞 (七三) 馬琴の小説作法 (七五) 大士の資格 (七八) 同志の出会い (七九) しのび泣き (七九) 八大傳の戀愛 (七九) 男性のエゴイズム (八六) クドキの本質 (八七) 遂げられぬ戀の行方 (八九)

## 芳流閣

大士の受難 (九二) 生彩ある描寫・躍動する文辭 (九三) 先行作品から (一〇〇) 禍福倚伏 (一〇二) 宿縁の地行徳 (一〇三)

## あらすじ

## 南總里見八大傳

水 野 稔

二三

安房の亂と玉梓 (二五) 伏姫を求める八房 (二六) 虚空に散つた玉 (二八) 信乃と與四郎 (二九) 一雙の玉兒 (三〇) すりかえた村雨丸 (三九) こぶから出た忠の玉 (四〇) 芳流閣 (四〇) 乳兄弟の信と悌 (四〇) 神隱し (四二) 庚申塚の快舉 (四三) 荒芽山の五大士 (四三) 嵐山の名笛 (四三) 對牛樓の復仇 (四三) 庚申山の妖怪 (四三) またたび丸 (四四) 指月院の奇遇 (四五) 賊婦船虫 (四六) 身代り首級 (四六) 小饅・落葉 (四七) 穂北の郷土 (四七) 古戰場に結ぶ庵 (四八) 湯島の居合拔 (四八) 五十子城落つ (四九) 反魂の術 (四九) 名馬青海波 (五〇) 妙椿の妖術 (五〇) 政木狐 (五三) 牝狸の死 (五三) 結城の大法會 (五三) 八大具足・八玉連串 (五三)

九二

六五

五九

七三

## 古那屋

舞臺轉換 (一〇三) 行徳入江から古那屋 (一〇四) 尺八の効果 (一〇七) 世話にくだけた會話 (一一) 漸層法的手法 (一二四) 破れた忍の字 (一二七) 惡縁の悲劇 (一二八) 伏縁・襯染 (一二八) 假面をぬぐ人物 (一二九) 江戸小説と演劇 (一三〇) 貝外の犬士 (一三三) 神童と理想的英雄像 (一三三)

## 荒芽山

荒芽山麓へ (一二四) 暮明きの淨瑠璃 (一二七) 老女の述懐 (一二七) 第一の訪客 (一三〇) 第二の訪客 (一三三) 三度目の出會い (一三五) 田文地藏のダンマリ (一三五) 掛合のセリフ (一五五) 舊夫の本心 (一三七) 夢幻劇の序曲 (一四〇) 第三の訪客 (一四一) 見忘れた夫婦 (一四三) 最後の願い (一四六) 旅包の秘密 (一四六) 陰鬼と陽人 (一五〇) 一個の死首 (一五二) 老樹の春 (一五三) 推理小説的興味 (一五三) 星合の情縁 (一五五) ワキ役の老人 (一五五) 犬士の離散 (一五五)

## 對牛樓

君は船臣は水 (一五七) 奸曲との戦い (一五七) 桃花の叙兒と木の葉の文字 (一六〇) 精妙な描寫 (一六〇) 漸層的手法 (一六二) 犬士の情愛 (一六二) 首級の符牌 (一七〇) 間接敘法の効果 (一七二) 活動的場面の描寫 (一七五) 鷺薙樓の出店 (一七五) 女装の勇士 (一七六)

## 庚申山

一〇三

一二四

一五七

一七六

犬士犬士を導く (一七七) 赤岩・犬村の悲劇 (一七八) 返鑰の草庵 (一八〇) 龍口・横笛 (一八二) 男らしうはあらずかし

(一九一) 夫の本心 (一九五) 妻の座 (一九六) クドキへの愛着 (一九七) 胎兒の生肝 (一九七) 徳目の傀儡 (二〇〇) 富山の照應 (二〇三) 人面獸子 (二〇四) 八大傳動物園 (二〇五)

## 談合谷

別格の犬士親兵衛 (二〇六) 三度目の虎 (二二四) 知音の批評 (二三〇) 「仁」玉の活躍 (二三〇)

二〇八

## 椿説弓張月

水野稔

二九

## あらすじ

三二

生い立ち (三三) 爲朝と白鍵 (三三) 信西の宣言 (三三) 白鍵の行くえ (三三) 伊豆諸島の教化 (三三) 官軍の攻撃 (三三) 白峯 (三三) 木原山の雌伏 (三三) 船を走らす天狗 (三三) 琉・球の二珠 (三三) 恩納嶽へ導く亡魂 (三三) 王位を奪う囃雲 (三三) 善政者爲朝 (三三) 花かごの中の鶴・龜 (三三) 舜天丸との再會 (三三) 碓黄商人と樵夫 (三三) 阿公の最期 (三三) 囃雲を射た桃の矢 (三三) 琉球を去った爲朝 (三三) 舜天丸の即位 (三三)

## 椿説弓張月

三三

『弓張月』のねらい (三三)

前栽の紙篇

紙篇の苦計 (三三三) 無慈悲の恩愛 (三三三) 馬琴の人情觀

(三三二) 史實の空想化 (三四三) 弓張月の劇化 (三四四)

白峯

白峯の爲朝 (三四八) 華麗な寄木細工 (三四〇) 秋成模倣 (三五)

江戸讀本の行きかた (三五)

形見の桂

待たれる人 (三五四) そはわが父上 (三五七) 義理と恩愛 (三六)

守りぬいた理性 (三六五) 二つの母性 (三六五)

忠魂の沙魚

悲運の英雄 (三六六) 靈魂の力 (三七〇) 南海の惡魚 (三七)

おわりに

〇馬琴の窓

馬琴物語——誕生から終焉まで—— 鶴 月 洋 二七

馬琴誕生 (三七五) 父の死 (三八〇) 一家の離合集散 (三八〇)

家を出て放浪生活へ (三八二) 母と鶴忠を養つて (三八二) 武

家奉公から醫師修業へ (三八三) 戯作者への道 (三八四) 結婚

(三八五) 活躍期の馬琴 (三八六) 下駄屋廢業 (三八六) 羅文逝

三三

三四

三五

三六

三七

二七

〇瀧澤馬琴の生活記錄

——天保三年正月の卷——

鶴 月 洋 三七

短編小説的方法で (三〇七) 神田同朋町の住居 (三〇七) 元

且 (三〇八) 二日 (三〇九) 三日から六日まで (三〇九) 七く

さ (三一〇) 八日・九日 (三一〇) 十日 (三一〇) 小正月まで

(三一〇)

馬琴讀本の挿繪と畫家

——北齋との問題など——

鈴木重三 三七

讀本挿繪の性格 (三一七) 合成寫實的な構圖 (三一七) 餘情餘

意の繪解き (三一七) 獨白の位相 (三一七) 當時の讀者の關心

(三一七) 馬琴の挿繪觀 (三一七) 神經質な觀察 (三一七) てき

びしい批判 (三三) 馬琴讀本の畫家とその作品 (三三) 挿  
繪界の勢力分布と馬琴・北齋の提携 (三三) 馬琴・北齋絶  
交説の検討 (三四) 他の畫家と馬琴 (三七)

## 出版者と讀者

濱田啓介 三六

本屋仲間 (三六) 本造り (三九) 賣り出し (三九) 貸本屋  
(三九) 板木 (三九) 合巻の讀者・讀本の讀者 (四〇) 批  
評家 (四〇)

## 發禁の時代

神保五彌 三七

馬琴の讀本が行われた時代 (三七) 寛政の改革——前期戲  
作の潰滅 (三七) 寛政改革後の戲作 (三七) 與篇文學とし  
ての讀本の登場 (四〇) 京傳と馬琴 (四〇) 寛政改革後の  
江戸戲作の場 (四二) 天保改革・戲作者 (四二)

## 京傳・馬琴

宮嶋夏樹 三六

——江戸讀本の系譜に觸れて——

本朝水滸傳の意義 (三四) 寛政の改革と京傳の轉向 (四九)  
馬琴の據頭と江戸讀本の確立 (五三)

## 研究史物語

林 美 一 三六

歴大な著作量 (五〇) 書き改められた馬琴 (五五) 明治の  
翻刻 (五六) 馬琴を愛した人々 (五六) 八大傳と月張月  
(五六) これからの研究 (五六) 馬琴の姓名 (五六)

## 参考文献

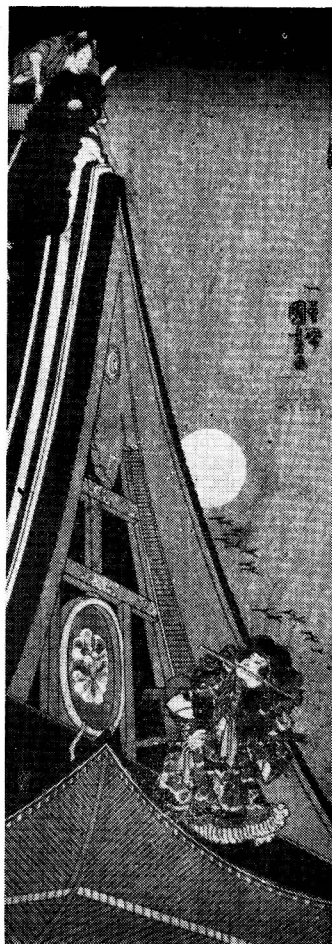
林 美 一 三六七

テキスト (三七) 傳記關係 (五六) 日記・書簡 (三七) 會  
像 (三七) 年譜 (三四) 著作に關するもの (三七)

# 傳八見里總南

賞鑑本文

稔 野 水



芳流閣（一勇齋國芳畫）





## あらすじ

## 第一部

## 發端

安房の亂と玉梓 永享十一年（一四三九）二月、鎌倉の管領足利持氏父子は、將軍足利義教と執權上杉憲實に攻められて報國寺で自殺し、その遺兒春王・安王を迎えて義兵をあげた下總の結城氏朝等の三年間の籠城奮戦もむなしく、嘉吉元年（一四四一）四月落城した。結城勢に加わつてこの時討死した里見季基は、十九歳の嫡子又太郎義實を諭して、譜代の臣杉倉氏元・堀内貞行をつけて落ち延びさせた。義實等は敵陣を斬りぬけて相模國三浦から安房に渡るとき、白龍の昇天するのを見て吉兆と喜んだ。

その頃安房の瀧田の神餘光弘は勢にはこり、愛妾玉梓の色に溺れていた。その臣山下定包は玉梓と密通して主家横領を企て、村民杣木朴平・洲崎無垢三が自分をねらい討とうとしていることを知り、光弘と乗馬をとり換えて二人に誤つて光弘を討たせ、そのまま主君の地位に代り玉梓を嫡妻として富貴歡樂を極めた。

安房の平館城主麻呂信時がこれを憎み、館山の安西景連を訪うて定包討滅を相談していたとき、里見義實主従が安西を頼つて來た。景連は内心義實をおそれ、安房の國にはいない鯉を三日間に持參せよと要求した。義實主従が鯉を探しかねて焦つていたとき、かつて神餘の臣で忠諫をきかれず放逐され、今は瘡かきの乞食と身をやつして定包をねらつている金碗八郎孝吉に逢い、その勸告によつて苦肉の計を以て、東條の城に定包の腹心菱毛酷六を討ち、氏元にこれを守らせて、さらに瀧田城に迫つた。義實は罪のない軍兵を哀れみ、城中の鳩數十羽に定